



令和7(2025)年度 病害虫発生予報 第6号

令和7(2025)年9月19日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

引き続き病害虫の発生に注意しましょう。

予想期間 9月下旬～10月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（ほ場率：平年比 141%、株率：平年比 150%）(+)。
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対 策 ・ 胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行うのが望ましい。
・ 発病株や周辺株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理（罹病残さを肥料袋等に詰め、空気を排出して口を閉じ、日当たりの良い野外に放置する）後に処分する。
- (4) 備 考 ・ [イチゴ炭疽病菌の薬剤感受性検定結果](#)、[令和7\(2025\)年度植物防疫ニュース No.10](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

2 いちご ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い（ほ場率：平年比 231%、株率：平年比 300%）(+)。
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対 策 ・ 作物の各部をよく観察し、早期発見に努める。
・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、若齢幼虫のうちにプレオフロアブル（RACコード I:UN）などを散布する。
・ 薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。
・ 卵塊や分散前の幼虫は、寄生葉ごと摘み取り、発生源とならないように適切に処分する。
- (4) 備 考 ・ [令和7\(2025\)年度植物防疫ニュースNo.13](#)をHPに掲載中。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（ほ場率：平年比 178%、株率：平年比 113%）(+)。
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)をHPに掲載中。

4 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 9月第1半旬までの青色粘着板への誘殺数は平年並(±)
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並(±)の見込み。
- (3) 対 策 ・ 開花の早いほ場では、被害が発生・拡大しやすいため、花を注意深く観察し、発生が認められたら早期に薬剤防除する。
・ 施設周辺の除草を徹底する。
- (4) 備 考 ・ 今後ハダニ類の天敵を導入するほ場では、防除薬剤の選択に注意する。
・ [アザミウマ類の薬剤感受性検定結果・続報](#)をHPに掲載中。

5 果菜類 コナジラミ類（トマト：黄化葉巻病（TYLCV）、黄化病（ToCV）・きゅうり：退緑黄化病（CCYV））

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在のコナジラミ類の発生量はトマトではやや多く(+)、きゅうりでは多い(+)。
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並(±)の見込み。

- (3) 対策 ・ ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部（出入り口、側窓、天窗）に 0.4mm 目合以下の防虫ネットを展張し、特に出入り口は二重にする。
・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。
・ 発病株は見つけ次第抜き取り、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
・ トマト黄化葉巻病の耐病性品種であっても、本病に感染すると伝染源となるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。
- (4) 備考 ・ [病害虫防除対策のポイントNo22](#)、[タバココナジラミ類薬剤感受性検定結果](#)を HP に掲載中。

6 ねぎ 黒斑病・葉枯病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない（ほ場率：平年比 51%、株率：平年比 15%）（－）。
・ 向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）、日照時間はほぼ平年並（±）の見込み。
- (3) 対策 ・ 発生初期の防除に重点を置く。多湿条件で発生しやすいため、秋雨期や曇雨天が続く場合は発生に注意して防除を行う。
・ 窒素過多は病害が発生しやすいため、適正な肥培管理を実施する。
・ 残さは、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

7 ねぎ シロイチモジトウ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い（＋）。
・ 向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。
- (3) 対策 ・ ほ場をこまめに観察し、本種による被害葉（葉が白く透けて垂れ下がる）を探すなど早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫は見つけ次第捕殺する。
・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、葉に食入する前の若齢のうちに薬剤防除を行う。
- (4) 備考 ・ [令和 7 \(2025\)年度病害虫発生予察注意報第 4 号](#)を HP に掲載中。

8 だいず・野菜類・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 9 月第 1 半旬までのフェロモントラップへの誘殺数はやや多い（＋）。
・ 現在の発生量は、だいずでは平年並（±）、なすでは多い（＋）。
・ 向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。
- (3) 対策 ・ 作物の各部をよく観察し、早期発見に努める。
・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。
・ 薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。
・ 施設開口部に 4mm 目合以下の防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
・ 卵塊や分散前の幼虫は、寄生葉ごと摘み取り、発生源とならないように適切に処分する。
- (4) 備考 ・ [令和 7 \(2025\)年度植物防疫ニュースNo.13](#)を HP に掲載中。

9 だいず・いちご・野菜類・花き類 オオタバコガ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 9 月第 1 半旬までのフェロモントラップへの成虫誘殺数は多い（＋）。
・ 現在の発生量はなすで多い（ほ場率：平年比 297%、株率：363%）（＋）。
・ 向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）の見込み。
- (3) 対策 ・ 新しい食害痕や虫ふんを目印に早期発見に努める。
・ 薬剤の浸透性を高める展着剤の利用が有効である。
・ 施設開口部に 4mm 目合以下の防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
・ 摘除した果実や脇芽に幼虫が寄生していることがあるため、残さはほ場の外へ持ち出し、発生源とならないように適切に処分する。
・ 発生ほ場では、土中に残る蛹を殺すため、栽培終了後、速やかに十分耕耘する。
- (4) 備考 ・ [令和 7 \(2025\)年度植物防疫ニュースNo.13](#)を HP に掲載中。

10 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（±）
・ 向こう 1 か月の気温は高く（＋）、日照時間はほぼ平年並（±）の見込み。

- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
 ・ 化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を HP に掲載中。

11 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
いちご	うどんこ病	平年並	やや少	なす	アザミウマ類	平年並	やや多
きゅうり	アブラムシ類	少	やや少	きく	アブラムシ類	少	やや少
	べと病	少	少				
	褐斑病	平年並	やや少				

【 季節の病害虫防除対策 】

○水稲 縞葉枯病（媒介昆虫：ヒメトビウンカ）、黄萎病（媒介昆虫：ツマグロヨコバイ）、イネカメムシ、スクミリンゴガイ

- ・再生稲（ひこばえ）は、イネカメムシの秋の生息場所や餌になる他、縞葉枯病や黄萎病が発生したほ場では、媒介昆虫の増殖源および病原の獲得源になります。収穫後は速やかに、丁寧な耕起を行いましょう。
- ・スクミリンゴガイは秋から冬に水田の土中で休眠します。発生ほ場では、耕起により貝を破砕し、防除しましょう。また、厳寒期(1～2月)にも耕起を実施し、貝を寒風にさらすことで殺貝効果を高めましょう
- ・ヒメトビウンカやツマグロヨコバイの越冬場所をなくすため、畦畔等の除草を徹底しましょう。

○麦類 種子伝染性病害

- ・オオムギ斑葉病や 小麦なまぐさ黒穂病、ムギ類黒節病等の防除のため、種子消毒を必ず行いましょう。
- なお、オオムギ斑葉病は遅まきすると発病が多くなるため、適期には種を行いましょう。

○なし 黒星病・炭疽病、りんご斑点落葉病・褐斑病

- ・病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となります。収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行いましょう。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意しましょう。

- ・[ナシ炭疽病薬剤感受性検定結果](#)、[リンゴ褐斑病薬剤感受性検定結果](#)を当センター HP に掲載中です。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和7(2025)年9月現在、全国 36 都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。

- ・ほ場内をよく観察し、発病が疑われる場合は、農業振興事務所もしくは当センターにご連絡ください。

- ・[サツマイモ基腐病に注意！](#)を当センターHP に掲載中です。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・本県のトマトでトマトキバガによる被害が確認されています。茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成されます。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変した外観となります。果実では、幼虫がせん孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空いて腐敗します。ほ場内をよく観察し、疑わしい虫や被害を見つけた場合には、適切に薬剤防除を行いましょう。

- ・[令和7\(2025\)年度植物防疫ニュース No. 3](#)を HP に掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。特に使用時期（収穫前日数）に注意して農薬を使用しましょう。
- 化学農薬の抵抗性の発達を防ぐため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

1 か月気象予報（予報期間9月20日から10月19日 9月18日気象庁発表）

向こう1 か月は気温の高い状態が続くでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項 目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	1 0	1 0	8 0
降 水 量	3 0	3 0	4 0
日照時間	3 0	3 0	4 0

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（TEL 028-665-1244）までお問合せください。
病虫害情報発表のお知らせはX 栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ
(<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。